

## 『百人隊長の僕をいやす』

聖書 ルカによる福音書7章1～10節 讃美歌 83 149 521 520 24

説教 森田幸男牧師

只今司会者によってルカによる福音書の7章の1～10節が朗読されました。今日はここを読んで、一緒に神様の導きにあずかりたいと思います。

今日の箇所には、“百人隊長の僕の病をいやす”という題がついております。百人隊長はローマの軍人です。文字通り百人の兵士の隊長のことです。当時、イエス様の国イスラエルはローマの支配下にありました。そしてローマ軍が要所に駐留していたのです。

その百人隊長の一人の部下、僕が病気になって、これをイエス様がいやされた、治されたという話であります。

あるいは今日はバザーということでお出でになった方々の御顔も見えるわけですが、今読んでもらったこの聖書の箇所は初めて読まれたかもしれません。それで皆さんに質問いたしますが、この百人隊長の部下、僕は、いったい幾つぐらいの人だと、皆さんは想像されたでしょうか。どんなイメージが浮かんだでしょうか。

「ある百人隊長に重んじられている部下が、病気で死にかかっていた」と、こういうふうにあるわけです。今質問いたしますのは、わたしも今度イエス様に直にお会いした時に、「この話は本当はどういう話だったのですか」とお尋ねしたいと思うほど、今日の箇所に感動を覚えました。わたしなりに、この部下・僕のイメージができていたわけですが、さて皆さんが思い描かれるイメージと合致するかどうかと思います。

これは私たちの教会の礼拝での習慣ですが、今日も私たちは『主の祈り』を一緒に祈りました。これは主イエス・キリストが弟子たちにお教えになった祈りですので、『主の祈り』と言います。礼拝毎に、そして各自も、色な局面でこの祈りを祈るわけです。

それで今、私たちはこの『主の祈り』を祈りました。「天にまします我らの父よ。願わくは御名を崇めさせ給え。御国を来らせ給え。御意の天に成る如く、地にも成させ給え」と。以下続くわけですが、そのように祈りました。長く教会に集っている方は、このように祈る時、いったいどういうイメージを心に描いてこの『主の祈り』を御祈りになっているでしょうか。

わたしの敬愛するスイスの神学者でカール・バルトという人がいるのですが、この人が本当に心底尊敬した牧師に、ブルームハルトというやはりスイスの牧師さんがおります。この人は『主の祈り』の前半だけ、「我らの日用の糧を今日も与え給え」以下は唱えないで、前半だけをお祈りすることが多かったと聞きます。前半は神様のことについてお祈りし、後半は私たちの日用の食べ物のことから人間関係のこと、誘惑に遭わせないでお守りくださいと、人間に関する願い事があるわけです。けれどもそのブルームハルト牧師はその前半だけをお祈りすることが多かったそうです。その思いは、本当に神様の御名が崇められ、神様の御意が天においては為されているわけですが、そのように地に為されますようにと祈るわけですね。御意が地に為されれば、そのことによって、人間のすべての事柄は満たされる。神様の御意が成れば、人間に対する最深の配慮がその御意の中にある。だから、

こまごましたことについては求めるまでもない、こういう心境であったようであります。

私は今日の聖書の箇所を読んでいまして、ここに神様の御意が何であるか。そしてその神様の御意が為されている、それを私たちは「神の国」「御国」とこう言うのですが、「神の国」というのはどういう国か。どういう状態か。そのイメージがはっきりと示されているのが今日の箇所だと思いました。そういう意味で今日のこの箇所はとても大事な箇所だと思いました。だから、「イエス様、その時の真相はどういうことだったのですか」と私がお尋ねしてみたいというのは、ここに書かれてあることを本当にあるがままに、正確に知りたいと思ったからです。

私たちは、神様の御意が実現した状態を「神の国」と言いますが、今日的な表現を使いますと、「世界の平和」、あるいは今や日本にも在日の人、ブラジルの人、東南アジアの人、などなど、世界各地の人が労働者として働いています。本当に異民族・異文化の人々が住んでいます。「異民族・異文化共生社会」というのが世界の趨勢でもあります。

今日の箇所を、私はそういう「世界の平和」とか「多民族・異文化共生社会」といったものは、一体どうあるべきか。そんなことについても語ってくれているように思います。ですから今後この避けて通れない世界の課題、人類的課題のわけですけれども、そのことを考える時、また我々は国内問題としてもいろいろな差別問題があるのですが、そのような中でいかに生きて行くべきか、どうあることが神に喜ばれる道なのかということを考える時、どうかこの聖書の箇所を思い起こしていただきたいと思います。

さて今御話してきたところでありますが、「ある百人隊長に重んじられている部下が病気で死にかかっていた」と、こうあります。この「部下」という言葉が今日の聖書の箇所ですら何回出てくるでしょうか。4回出てきますね。「百人隊長に重んじられている部下」というのですから、本当に右腕のように百人隊長が頼りにしている部下ということが、この語感から浮かんできますね。それが私は自然だと思えます。

ところが実はこの「部下」と訳されている言葉は、4回ともそうですが、もとの言葉は「奴隷」という言葉なんです。それで7節を見ますと、「わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないと思いました。ひと言おっしゃってください。そしてわたしの僕をいやしてください」とあります。これは百人隊長自身の言葉を、友人がイエス様に伝えているわけですね。ここでは、わたしの「僕」とこの百人隊長は言っているわけです。これは聖書の原文をちゃんと訳し分けしているのです。「部下」と訳したのは、「デューロス」という奴隷を表す言葉ですが、このわたしの「僕」と訳されている言葉は、実は「パイス」という言葉で、別の言葉です。両語に重なる意味もあるのですが、それでこの「僕」と訳された「パイス」というのはどういう意味か。先ず最初の意味は、「少年、少女」です。第二の意味は、「僕」とか「奴隷」です。第三の意味は、「従者」とか「召使」です。そして第四の意味では、「家来」「部下」を表します。第一の意味は「少年、少女」なのです。

そして、この部下・奴隷は「百人隊長に重んじられていた」と形容されているのです。これは私たちが以前使っておりました口語訳では、「頼みにしていた僕」となっています。「頼みにしていた僕」とか、「重んじられていた部下」ということになりまして、どうしても相当の年齢の部下なり従者のイメージが湧きますね。ところが7節の「わたしの僕」というのは「パイス」という言葉なんです。これも部下とか召使と言う意味もありますけれ

ども、第一の意味は、「少年、少女」でした。ここが、私たちが今読んでいる聖書が「翻訳聖書」だから、こういうくどい説明をしないとイケないわけです。翻訳の仕方、イメージが変わってしまうわけです。

それで私は日ごろいろんな訳を参考にするわけですが、何かの時に、リビングバイブルを読むのですが、リビングバイブルでは、「目を掛けていた召使」と訳しているのです。これでも年齢は少し高いイメージがあるかもしれませんが、「目をかけていた」、「重んじられている」、「頼みにしていた」という、この形容詞の訳を変えると、これだけでも大分感じが変わってくるわけです。因みにフランススコ会訳では、「ある百人隊長の気に入りのしもべ」となっています。わたしの結論を言いますと、これは「大事な」という意味もあるのですが、「この百人隊長にとって大事な召使の少年」というのが、私が描いたイメージなんです。そしてこの少年は百人隊長の身の回りの世話をしていたのではないかと。そういうイメージをわたしは描いたのです。「わたしはそういうイメージを描いたのですが、これは当たっておりますか」と、私はほんとうにイエス様に本当に聞いてみたいのです。

そして今日の箇所は、本当にいろんなことを示していますが、この百人隊長はローマ人です。その召使の少年が病気で死にかかっている。そこで彼はどうしたかということ、彼はイエス様が人々をいやしておられる事を聞いていたので、先ずユダヤ人の長老たちに使いに行ってもらうわけです。そして長老たちは何と言ったか。「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです。」こういうふうには言っています。そこでイエス様と一緒に出かけられた。そしてその百人隊長の家から遠からぬ所まで来たときに、今度は百人隊長は友達を使いを立てて、「どうぞ御足労くださいませように。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ですから、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないと思いました」と言っているのですけれども、今ローマがイスラエルを、世界を支配しているのですね。そのローマ人の百人隊長なんです。それでイエス様を含めて他の人たちは皆、支配されている国の人たちなのです。ところがこの百人隊長の言葉を聞いていますと、どちらが支配者なのかと問いたくなるような、そういうことをこの百人隊長は言っています。

ユダヤ人は異邦人と交際しなかったのです。自分の家にも入れないし、異邦人の家にも入らない。自分たちは本当に神を信じる、良い意味でも悪い意味でもエリート意識を持っていたのが、イスラエルという民なのです。「真の神の民」という意識です。そのことをこの百人隊長はよく知っておりましたので、そういうユダヤ人の感覚を重んじて、「わたしはイエス様のところに行く資格さえありません」と言っていますが、この場合はただそのような相手の意識・文化を重んじたと言うだけではなく、もっと深くイエス様の本質を彼は見抜いていたと言っているかもしれません。「わたしは本当にあなたの前に行くことができるような者ではありません。それで御足労くださいませように。ひと言おっしゃってください」と言っているのです。

「ひと言」でいいのです。病気は悪霊によってもたらされるのですから、「悪霊よ、出て行きなさい」とイエス様が、ひと言言って下されば病気は治るわけです。だから、「わざわざお出でくださらなくても、ひと言悪霊に命じてください。そうすれば悪霊は出て行きます。ひと言おっしゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください。」

「このひと言がどれだけ力を持つかというのは、わたしは百人隊長です。わたしの下にも百人の兵隊があり、一人に『行け』と言えば行きます。『退け』と言えば退きます。『伏せよ』と言えば伏せます。」隊長の命令を聞かないで、伏せよと言っているのに伏せなければ、弾に当たって死ぬわけですね。当時は弾はなかったですね。石に当たって死ぬわけです。隊長は全体状況を見て、「行け」「退け」「伏せ」と、命令を発するわけです。それによって命が助かることもあるわけです。そういうことですから、隊長の命令には、絶対服従なんですね。

「そしてまた、わたしには部下もおります。」この「部下」は先ほども言いましたように「奴隷」という言葉です。「その奴隷に、『これをしろ』と言えば彼はしてくれます。」だからひと言、権威ある人が一言発すれば、それは言葉だけけれども、言葉の通りの事が起こります、というのが百人隊長の日常の経験なのです。「ですから、イエス様は神の国の権威を持っておられるのですから、ひと言おっしゃってください。『悪霊よ、出て行け』と言っていたら、わたしの僕は治ります」と、こう友だちを通して言っているわけです。

これを見ていますと、ローマ人とユダヤ人。長老たちと友人。そして支配国、被支配国。民族が違う。文化が違う。生活習慣が違う。いろんな違いがこの箇所にも全部あるわけです。そしてわたしは、奴隷でもあり、僕でもあるこの少年召使いは、ユダヤ人の少年だと思っているのです。

わたしも今週からアメリカへ行くというのですけれども、全然しゃべれないわけですね。ですから“アンニョンハセヨ”一言でアメリカでも通そうかと思っているのですけれども、皆さん面喰いますね。外国人だといっぺんに思いますでしょう。実はお互いに外国人同士なんですけれども、言葉が通じないというのは本当に不便ですね。ただ今日の週報にも書いていますように持田先生とずっと同行ですので、わたしのインタープリター・通訳者にもなったださるので安心です。先生の後について行きますよ。先生の真似をしますからねと、この間から言っているのです。

百人隊長はイスラエルに進駐し、駐留しています。けれども言葉が不自由ですね。そんないろんな事情でこの少年ユダヤ人を、召使に彼は採用したと思います。そしてこの少年を通していろんなことを彼は知ったのではないのでしょうか。そして「ユダヤ人のあなたがたが本当に必要としているものは何なの？」というふうに彼に聞いたのではないのでしょうか。そして、「私たちは貧しくて、神様を礼拝する会堂が欲しいのですけれども、そんな力もないんです」というふうに召使の少年は答えたかもしれません。「それが一番必要としていることなの？」ということで、この百人隊長はユダヤ人のために会堂を建てたのではないのでしょうか。

本当に他国を援助する時に、お金を送っても、物資を送っても、それが末端に届くとは限らないのです。もう途中で上にいる者が横領するのです。どこの国にも悪い人がおります。そして被災地には届かないということはよくあるのです。阪神大震災の時にこんな経験をしました。避難民が千人くらいいた学校の校庭に送られて来た物資が山積みされていたのです。それを配らないのですね。というのは、千人避難していて、送られて来たのが八百個で、二百個足りないから配れない。こういう形式主義なんですね。だから私たちはそれを貰ってきて、必要な人の所へ届けました。十何年前の阪神大震災の時のことです。

だから救援物資を送るのですけれども、それが本当に必要としている人の所に届くというのは、もう一つも二つも小回りの利く人がいないと届かないのです。手がまわらないということもあるのですね。

私はこの百人隊長は賢明な人だったと思います。「本当に何が必要なの？」と少年召使いに聞いたとわたしは想像します。そして、「私たちにとっては、神様が一番大切なのですが、その神様を礼拝する会堂さえ私たちは建てる力がないのです」と言うことを聞いて、彼はその願いの実現に助力したのではないのでしょうか。

そしてわたしはここから小説のように話を膨らませるのですが、このローマ人の百人隊長とユダヤ人の召使の少年との心の通い、人間的で、年齢の差を超えた人格的などと言っていい心の交流が深まっていった。そんな中である時、彼が急病でしょうね、死にかかった。そこで、何としても助けたいというので、この百人隊長はユダヤ人の長老たちに、「どうしてもこの子を助けたい。イエス様の所に使いに行っていたいただきたい」と言って頼みました。そしてイエス様が来てくださるというので、そしてまた彼は友人を使いに送り、「御足労くださいませように。ひと言おっしゃってください」と、願い出たのです。

これは文化とか、そういうことを配慮した上でもあると思いますけれども、わたしの想像は更にこう膨らみます。百人隊長は今息を引き取らんとするこの少年の傍にいて、彼の枕もとにいて、百人隊長は其処を離れられないのです。だからユダヤ人の長老、また、友人に頼んで、使いに行ってもらおうというふうなことになったのではないかと思います。

この友人を通しての言葉を聞かれた時に、9節をみるとこうあります。「イエスはこれを聞いて感心し、従っていた群衆の方を振り向いて言われた。『言っておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。』」

今日の世界のいろんな争いのもとには、「一神教が悪いのだ」という人が少なくありません。自分たちの宗教が唯一絶対正しい。キリスト教がそうだ。ユダヤ教がそうだ。イスラムがそうだ。そんなことを言っているから、溝が深くなる。争いが絶えないのだ。正に異文化共生が必要なのだと。そういう論調であります。そして前半も後半も正しい主張ですけれども、キリスト教は、今日の箇所などは、これはキリスト教精神そのものだと言っていいと思うのですが、イエス様は、「言っておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」と言われたのです。これほどの贅辞はありませんね。

この百人隊長はローマ人ですから、イスラエルの信仰とかはその少年を通して彼は理解したと思いますけれども、そしてなお文化の違いとか、支配・被支配、民族の違いとか一切の違いを持ちながら、この少年とこの百人隊長の二人の魂の交流の中で、それらの違いを越え、抜け出ていったと思うのです。抜け出て行って、一人の存在がどんなに意味深いか、そして一人のこの少年は奴隷ですね。そして奴隷は当時、もの言う道具、口をきく道具、命令をしたらちゃんと聞いてその通り行う道具、そして使えなくなったら、また差し替えればいい道具というぐらいのことだったのです。その奴隷でもあり、召使の少年一人の命を救わんとして、ここでは全ての人自分が自分のできることをしている。総力を挙げ、総動員しているわけです。すべての人が一人を救うために一生懸命になっている。そのように人を動かしたのは一体何かと言えば、この百人隊長の信仰と、イエス様は言っておられるのですね。「イスラエルの中でさえ」と言っておられるのは、アブラハムの信仰にも劣ら

ない、匹敵する。この言葉は文字どおりにはアブラハムを超える信仰をこの百人隊長は現に生きているとくらいに、イエス様は言うておられるのかもしれませんが。

そうすると、ここに神様の御意があるのですね。一人の人間は、イスラエルの人間であるか、ローマ人であるか、日本人であるか、韓国人であるか、朝鮮人であるか、そんなことで神様は分け隔てなさらない。一人の人間は、何としてでも救い、健康で、本当に祝福にあずかるべき存在です。そのために、人それぞれが出来ることは何でもする。正にこれが今日、「多民族異文化共生社会」と言っていることの真髄ではないでしょうか。

「使いに行った人たちが家に帰ってみると、その部下は元気になっていた」とあります。この話は聖書の他にも出ておりまして(マタイ 8:5-13、ヨハネ 4:43-54)、その回復しだした時間は何時頃であったかと聞けば、それはイエス様が、「これほどの信仰を見たことがない」と言われたその時刻と、この少年が危篤状態を脱した時間とが合致することが記されています。その時は、イエス様が、心を動かされた時です。

今日ここに記されているのが、「神の国」の現実だと思うのです。死後に天国にももちろん私たちは導き入れられるのですけれども、天国を死後に待つ必要はないわけです。このように一人の人間がイエス様によってもということ、神様によって、そしてユダヤ人によって、ローマ人によって、一人の病んだ奴隷のために皆が助け合おうと思って一つになっている所、そこに「神の国」があるのです。こういうことを経験した人は、“本当に生まれてよかった。命を与えられてよかった”と思うでしょう。

今日は教会バザーの日でありますけれども、この間バザー委員の人たちとも話したのですけれども、来年からこのバザーの名称を「教会バザー」としないで、「ふれあいバザー」という名前に変えましょうというような話をしたのです。正にバザーは教会がするのですけれども、ここで神に触れる、或いは人と人とが触れ合う、そういうことを通して、安い良い物を買っていただきたいわけですが、それは二次的なことで、本当に人間が大事なのだということが本当に実感できる、そういう触れ合いの場にバザーがなればいいなと、そんな思いで、「ふれあいバザー」という名称になるかもしれません。その「ふれあい」と言うことの意味は、百人隊長とユダヤの少年が本当に魂と魂が触れ合って、いろんな違いを越えて、神の心に触れたと思うのです。それが人々を無理矢理に命令で動かすのではなくて、それを見た人がほっておけないから、ユダヤ人の長老が使いに行く。友人たちが使いに行くという事に、おのずからなった。我々もこういう中に身を置きたいなと思いません。我々の礼拝も、バザーも、我々が生きる日常生活も、そういう場になればいいなと、そんなことを今日の聖書を読みながら思った次第であります。

お祈りいたします。

すべてのもの、すべての人の創造者である主イエス・キリストの父なる神様。

滅びにさえ値する者を、あなたは忘れ給わず、私たち一人一人をこの上なく大事な者として顧みてくださいます。今日、聖書を通してそのことを新たに思い知らされ、心から感謝いたします。これからは、あなたを一そう尊び、出会うすべての人を尊び、あなたの御意がこの地に、この中之島に成るように歩ませてください。

主イエス・キリストの御名を通してお祈りいたします。アーメン